

「よき祖先」になるとはどういうことか

——ローマン・クルツナリク『グッド・アンセスター』を手がかりに——

竹中 信介

一．はじめに——「先祖になる」という視座——

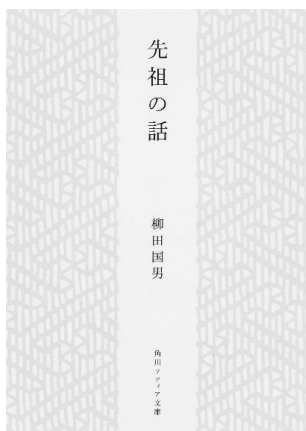
私たちが「祖先」（あるいは「先祖」^①）について語るとき、自分たちよりも前の世代、つまり過去、あるいは死者のことを念頭に置くのがふつうであるが、本稿で検討する、イギリスの文化思想家ローマン・クルツナリクの著書『グッド・アンセスター』^②（以下、「本書」）では、現在、のわれわれ自身（生者）が、未来世代（子孫）にとっての「よき祖先」になるにはどうすればよいのか、という問題が提起され、「祖先」についての語りの時間軸が、従来の過去から、現在、そして未来にシフトしている。まず、この点が本書のユニークな視点であることを指摘しておきたい。



ここで、本書の内容の具体的な検討に入る前に、日本民俗学の創始者の一人である柳田國男（一八七五—一九六二）の『先祖の話』（一九四六）を参考に、「先祖になること」の意味について理解を進めておきたい。本書は一般に知られているように、柳田が昭和二〇（一九四五）年三月の「東京大空襲」のも

と多くの「死者」が出たことに衝撃を受け、四月から五月にかけて一気に執筆を終え、終戦後の昭和二一（一九四六）年に刊行したものである。同書で柳田は、若くして戦争で亡くなっていく（特に子供がいらない）人たちが、誰からも「先祖」として祀られなくなること、そして「家」の消滅という日本の未来を危惧して、「先祖」「家の伝統」「祀ること」などの意義について多くの事実に基づいて語っている⁽³⁾。

その中で、本稿と関わりが深いと思われるものとして、「御先祖になる」という項目（柳田一九四六／二〇一三、二一―二二頁）がある。ある日、柳田は、南多摩郡を歩き回っていたとき偶然、自分は「御先祖になるつもりだ」と話す柳田自身と同年配（七〇歳くらい）の老人に出会った。彼は事業で功をなし、六人の子供に恵まれて、それぞれに家を持たせることがで



き、母も引き取って安らかに見送ることができた。あとは、「先祖」になるだけです、と柳田に語ったという。この男性の意図するところは、どこにあったのか。批評家の若松英輔によれば、「この男性は、自分の成功を誇っているのではない。自分とその家族の毎日を守護する「先祖」の働きに感謝し、死者となつてからは、自分もその一翼を担いたいという内心を語っているのである」（若松二〇一一、一二八頁、傍線は筆者）ということだ。

さらに、次のように「先祖」をとらえる若松の言葉は、本稿にとって重要である。

「先祖」とは、過去の人物の呼び名ではない。むしろ、生者が自覚する、死者としての在り方である。むしろ、死していつそう生者との関係を深める者の呼び名である。生者はよき「先祖」となるべく毎日を生きる、ともいえる」（若松二〇一一、一二八頁、傍線は筆者）

また、若松との親交が深い政治学者の中島岳志が、『先祖の話』を読み解いて語った以下の言葉も示唆的である。

「『未来の私』は、次の子孫にとつての先祖となり、家の安泰を支える重要な役割を担う。そのため、『現在の私』は先祖に対する供養と謝恩を繰り返すと同時に、死後に「先祖となること」を意識しながら生きる。『現在の私』の目標は、今を生きていることだけあるのではなく、死後に先祖となつて家を守って

行くことにも向けられる」(中島二〇二一a、一七九頁、傍線は筆者)

クルツナリックと柳田は、洋の東西及び時代を異にするが、奇しくも「非常事態」(地球と人類の存続の危機、日本の家の存続の危機)という点で共通の土台を持ち、「よき祖先(先祖)になること」の重要性を、それぞれの視角・立場から強調していることが確認できる。

また、彼らの視点は、筆者の言う「継世代倫理(the transgenerational ethics)」(竹中二〇一九)の考え方に新たな光を当ててくれる。これまで筆者は、「現在」の地点から遡った文字通りの「過去」(歴史や伝統)を重視した議論を展開してきた。しかしながら今回、私たち「現在世代」を、「未来世代」から見ての「過去世代」つまり「祖先」と見立てることによって、私たち自身が「祖先」として、これから生まれてくる「未来世代」の人類に対して恥ずかしくなく、また彼らに対して、義務や責任を果たすことができる生き方を、より切実に希求することが可能になったと考える。本稿を始めるにあたり、まずそのことを確認しておきたい。

二. 短期思考から長期思考への転換の必要性

(一)「マシユマロ脳」と「どんぐり脳」

① 短期思考と長期思考のせめぎ合い
本書全体を貫く視点は、「短期思考」と「長期思考」という人間存在が持つ思考特性である。著者(クルツナリック)は、それぞれの思考を象徴的に「マシユマロ脳」と「どんぐり脳」と呼ぶ。

- ・ マシユマロ脳(短期思考) : 目先の欲望や報酬に執着してしまふ思考
- ・ どんぐり脳(長期思考) : 遠い未来を描き長期的な目標に向かって努力する思考

人間は、誰しもがこの両方の思考特性を持っており、この二つの間で常に綱引きが行われているという。

筆者(竹中)が挙げる例…

- ・ 試験に備えて勉強しなければいけないのに、ついついゲームをしてしまふ。
- ・ 引越に向けてプランを組まなければいけないけど、ドラマを見てしまふ。

・地球（文明）の滅亡を防ぐために節電しないといけないと考えながらも、暖房の温度を上げてしまう。

クルツナリツクは、このように述べる。

「よき祖先になることを望むなら、（…）確かに私たちの心において長期的な思考は可能であると、十分に認識することが必要不可欠だ」（二五頁）⁽¹⁾

「私たちは、文明崩壊の見通しについて不可知論者である必要がある。つまり、起こるかもしれないという現実的な覚悟を持ちつつ、起こらないかもしれないという可能性にも心を開いておくということだ。もしその可能性が存在するなら、行動を起こさず将来の世代に背を向けることは、道徳的に許されない。災害を回避し、文明が変容を遂げる道筋に飛び移るチャンスがまだあるのに、もしあきらめることを選んだら、将来世代の彼らは決して私たちを許さないだろう」（一八〇～一八二頁、傍線は筆者）

② 「マシユマロ脳」から「どんぐり脳」へ

現在、「マシユマロ脳」が幅をきかせる現代文明が進行しつつある。それはつまり、未来世代のことを考えずに、「今、ここ」（だけ）を大事にするという価値観が人々の中心にあることを意味する。

筆者が挙げる例…

・「スマホ脳」…Facebook、LINE、ゲームなど、人間の脳を刺激して、「今、ここ」から抜け出せなくする仕組み（ハンセン二〇二〇）

短期間にもたらされる中毒性や衝動性を、著者は「マシユマロ脳」と呼ぶ（心理学で用いられる「マシユマロ・テスト」から命名）。これには、進化生物学的な論拠があるという。古代において、食料が容易に食べられなかったとき、あるいは外的に襲われたとき、私たちの祖先は、反射的に求められる行動（食料に手を伸ばす、逃亡する）をとっていた。それ故、食料が豊富な時代になっても、古代に獲得した思考法や行動の習慣が残っているため、度を越して食べてしまう、というわけだ（二七～二八頁）。(Cf. モラロジーにおける「自己保存の本能」と「利己的本能」の説明)

そこで、「どんぐり脳」への期待が高まる。

私たちの祖先は、どのように「長く考えられる脳」を育てたのか？（三七頁）

① 道順を見つける力…脳内での「認知地図」の作成 時間と空間のマッピング

② おばあちゃん効果…世代をこえて知恵や文化の継承が可能

能になった

③ 社会的協力：信頼、互恵、共感に基づく協力関係は、時をこえて続くつながりが生まれることから始まる

④ 道具のイノベーション：石器道具技術の発展には、複雑な連続工程を計画し、将来の目標を明らかにする能力が求められる

ここで、著者による脳科学的な視点からの補足説明を見ておくと、未来に関する神経処理のほとんどは、脳の「前頭葉」が司っている。前頭葉は、「どんぐり脳」のオペレーションセンターであり、数週間から数十年先の未来の状況を想定し、長い時間をかけて複雑な計画やプロセスを描くことができるタイムマシンである（三二頁）。

このように長期的に考える能力が進化しているにもかかわらず、私たちの予測のほとんどがごく近い未来のことに集中している。シカゴ大学の研究によれば、未来に関する思考の八〇％は、当日または翌日に向いており、一年以上先のことを考えているのは一四％、一〇年以上先のことを考えているのはわずか六％だったという（三二頁）。

つまり、「マシユマロ脳」が「どんぐり脳」を凌駕する、という心理学的な事実が厳然と存在しているのである。それでは、私たち人間はどうすればよいのか。

（二）文明論的視座から

著者も指摘しているように、進化生物学者で生物地理学者のジャレド・ダイアモンドの『文明崩壊』（二〇〇五）によれば、生態系の破壊が「文明崩壊」の根源となってきた。さらに、その背景には二つの原因がある。それが、①「勇気ある長期思考」の欠如と、②「短期的な意思決定」である（ダイアモンド二〇〇五／二〇一二b、四五七頁）。私たちは、今すぐ行動が求められる緊急性の高い課題として、長期思考を求めねばならない、という避けがたいパラドックスに直面している、というのが著者クルツナリックの主張である（一二頁）。

① 未来の不確実性と全体論的な予測

私たちの未来は、ますます予測不可能となり、不確実性が増しつつある。一〇年先どころか、一年先の未来も見通せないような状況である。そこで、未来を予測する、という行為を諦めて、近視眼的に生きれば良いのかと言えば、そうではない。クルツナリックは、「ホリスティック（全体論的）な予測」として、次のような提案を行っている。

「それは従来の予測よりもはるかに長い、数十年、数百年にも及ぶ時間軸を示してくれる。また、より広い視野で、従来の予測で主流派となっている組織や企業の狭い意味での利益ではなく、グローバルな規模での人と地球の大局的な展望に焦点を

当てていく。それは、短期的に特定の出来事を予測するのではなく、私たちの惑星文明が長期的にたどる可能性のある道筋を幅広く描くものだ」(一四二頁)(Cf. イアン・スチュアート『不確実性を飼いならす―予測不能な世界を読み解く科学―』(徳田功訳、白揚社、二〇二一年))

② 人類文明の三つの道筋

人類が生み出した文明は、果たしてどのような道筋をたどるのか、また私たち人類はどのような進路を歩むべきなのか。この先をどう歩むのかという課題に対して、仮説を持つておくことの重要性を、クルツナリックは以下のように述べる。

「人間社会の将来的な軌道を理解することは、長期思考の中心となる。文明の発展と衰退の可能性についていかなる仮説を持つかによって、立てる計画、作り出す運動、歩むキャリア、さらには子どもを持つかどうかの選択なども影響を受ける。長期的にどのような道筋があり得るのかというイメージを持つことは、未来に向けて私たちが集団的及び個別的な旅をうまく運ぶために、なくてはならない精神的な足場となる」(一五三―一五四頁、傍線は筆者)

ここから見えてくるのは、文明論が、「人間存在」さらには「自然(地球環境)」にとつての根本問題である、という視点である。文明の進路いかんによって、人間と自然の未来が左右さ

れるのである。この視点は決定的に重要であり、現代文明が岐路に立っていると言われる所以である。

人類が築いてきたあらゆる文明が崩壊する可能性があるとしても、進路を変更できる可能性があると考えerことは必要である。クルツナリックは文明の進路について、次の三つの道筋を描いている。

文明の未来の可能性についての三つの道筋(二五六―一五九頁)

①「崩壊(Breakdown)」…物質的な進歩という目標に向かつて努力を続けるものの、近いうちに社会的な崩壊点に達してしまう、「お決まりのやり方」の道(社会の混乱、大規模な飢餓、制度の崩壊など)。

②「改革(Reform)」…世界的な危機には対応するものの、不十分で断片的な仕方でもかれ少なかれカーブを外側に広げるに留まるもの。現状維持ないしは、終焉の先延ばし。

③「変容(Transformation)」…社会を支える価値観や制度の根本的な転換。新しいシステムが古いものに取って変わる上昇軌道を後押しできるかどうかにかかっている。例…宇宙への移住、生態系の危機に対処するための惑星レベルの新しい統治システムの構築など。

三番目の「変容」の道筋が最も好ましいと考えられる。比較文明学者である伊東俊太郎の講演集は、奇しくも『変容の時代』（二〇一三）と銘打たれたが、少なからぬ識者が文明の「変容」を求めている。クルツナリックは次のようにまとめる。

「本書は、私が「長い今の文明」と表現した「変容」の道を志すものだ。その志は、深く埋め込まれた長期思考の精神に基づいて、来るべき世代のために地球上の生命が繁栄するのに必要な環境条件を保護し、促進することにある。そこに待つのには、代議制民主主義と成長依存型経済という古い制度が支配的な地位を失い、新しい政治的、経済的、文化的形態に取って代わられる世界だ」（二五九頁、傍線は筆者）

③ 「現在化」する未来

文明の崩壊や、地球環境の深刻化は、遠い未来の出来事ではない。危機は、異常気象の常態化や、森林破壊による未知のウイルスとの遭遇などの事例とともに、私たちの身近に迫っている。未来は予測できない、だから何もできない、という言い訳は通用しない。

「人類の未来が不確実性のブラックボックスであるわけではない。全体論的な予測によれば、自然界の生と死のサイクルと同じように、時間の経過とともに上昇と下降を繰り返すS字カーブのパターンが明らかになってくる。未来のことを何も知ら

ないと主張することは、容易に無気力の言い訳となり、何もしない「不作為」のイデオロギーになりかねない。起こり得る未来の輪郭については、地球や生命のシステムに関する何千もの科学的研究から明確な知識を得ることができる。生態系の緊急事態の影響は、干ばつや異常気象、何百人もの人々の食料や水の不安の増大という形で、すでに現実のものとなっている。特に北半球の富裕国と南半球の発展途上国の両方で、貧困層や周縁化されたコミュニティが最も深刻かつ迅速な打撃を受けている。未来があまりにも現在化している」（一六一頁、傍線は筆者）

これまで環境問題が深刻化するのは、ずっと先の未来（二〇〇年や二〇〇年後）においてであると予測されていたため、環境問題とは端的に「未来問題」であり、それ故、「世代間倫理」が必要である、と言われてきた（徳永二〇二三、一三一頁）。しかし上記のとおり、今や、様々な環境問題が深刻化しつつある。「未来があまりにも現在化している」とは、そのような事態を指す。私たちは世代間の倫理を問わなければならないと同時に、世代内において「自然と人間が調和する倫理」を切実に探求しなければならない地点まで来たのである。

（三）人間存在論の視座から

① 過去と未来を見ることで……



「一・はじめに」で触れた内容にも関わるのだが、「よき祖先（先祖）になる」という課題は、死者と生者と子孫（未来世代）との関係を問いなおす、という課題とパラレルに考えるべきであろう。クルツナリックが示した左の図（九七頁）は、感覚的（視覚的）に、我々生者から未来世代への責任の大きさを示してくれるものである。過去五万年の死者が千億人、生者が七億人であるのに対して、この先五万年間に生まれてくる未来世代は、六・七五兆人と試算されている。

まだ生まれていない「未来世代」を身近に考えることは難しく、どうすれば身近に感じることができるのか、という課題

は、筆者自身、以前から考えてきたことだが、この図のように視覚的に未来世代を感じる、あるいは数字でその大きさを見ることによって、少なからず未来世代への責任の大きさを感じることができるようになるのではないだろうか。

② 意味のある目標に向かう

クルツナリックは、「人間は、人生に目的と方向性を与えてくれる意味のある未来の目標に向かって努力することで成長する」ということを、過去二千年の間に哲学思想がもたらした最大の発見の一つに挙げている（一六二頁）。

このことは、未来世代に対する利他的な振る舞い、さらには、「よき祖先になること」を念頭に置いても、重要な事実と言える。私たち自身の人生に「目的」と「方向性」が与えられないような目標であれば、具体的な行動に結びつくことはない。

「アウシユビッツの生存者であり、実存的心理療法の創始者であるヴィクトール・フランクルは、彼が「具体的な任務」と呼ぶ、自己を超越した未来のプロジェクトや理想に身を捧げることで、人間は意味を見出すことができると考えた」（一六二頁）

クルツナリックは、個人としての目標（テロス）は様々であるが、遠い未来への行動を促すには、人類規模での目標を設定

することが必要であるという考えを示し、人類の「超目標」を次のように五つ設定している（一六三―一六四頁）。

人類のための超目標（一六四頁）

- ① 永続的な進歩…物質的な改善と終わりになき経済成長を追求する。（×）
- ② ユートピアの夢…政治的・経済的・宗教的な信念に基づいて理想の社会を創る。（△）
- ③ テクノ解放運動…異世界を植民地化し、技術を駆使して人体をアップグレードする。（△）
- ④ サバイバルモード…文明崩壊に適応し、基本的な人間の生存のためのスキルを開発する。（○）
- ⑤ 一つの惑星の繁栄…豊かな地球が維持できる範囲で、現在そして未来のすべての人々のニーズを満たす。（◎）

本書を読んでいくと、クルツナリックは、明らかに①については否定的に見ており、「私たちがグッド・アンセスター、よき祖先となり、次の世代にふさわしい世界を創造することを目指すのであれば、永久的な進歩はもはや未来にはそぐわない過去の目標として手放すべき時が来ている」（一六七頁）と述べている。②と③については、流動性が高く、予測の難しいSF（サイエンス・フィクション）的な要素を含む話題であるため、

現状の事実関係の整理や推測の次元に議論をとどめている。

他方、④については、人類の適応力に期待するところがあり、筆者自身も、消極的ながら「文明崩壊」に備えて対策を練る、という選択肢は取り得ると考える。しかしながら、クルツナリックとともに、理想的には、⑤の方向性が最も好ましいと考える。地球と人類が無理なく進んで行ける持続可能な方途は、（少なくとも現時点では）諦めずに考え続ける必要があるだろう（図のカッコ内の記号は筆者が便宜的に付したものである）。

補論…未来世代への「利他性」——未来において起動する利他——

道徳科学研究所（旧名称…道徳科学研究所センター）では、二〇一三―二〇一五年度にかけて、「利他性を考える」という共通テーマが掲げられ、多岐にわたる研究が蓄積されたが、筆者は、未来世代への利他性を考えるために、「世代間倫理」という概念に着目し、研究を進めた（竹中二〇一六を参照）。その後、継続的に「利他性」概念のリサーチを続けてきているのだが、近年では、新書レベルでも、「利他」に関する書籍（伊藤亜紗編『利他』とは何か、集英社新書、二〇二一年）が刊行されている。

そんな中、ひと際、筆者の注意を引き付けたのが、本稿でも触れた政治学者の中島岳志による、『思いがけず利他』（ミシマ社、二〇二一年）という著作である。ここでは本著作全体の内

容に言及する余裕はないが、一つだけ、未来世代への利他性との関連で指摘しておきたい点がある。それは、「利他」というのは、未来において受け取られた時点ではじめて起動するものである、ということである。つまり、行為主体が、ある行為を行った時点では、受け手にとって「利他」かどうかは不明である、というのがポイントである。他者のためを思っ行った行為が、相手を傷つけることもあり、また逆に、偶然何気なく行った行為が、未来において思いがけず他者を利することもあるのだ（中島二〇二一a、一八一―一八二頁も参照）。

「発信者にとって、利他は未来からやって来るものです。行為をなした時点では、それが利他なのか否かは、まだわかりません。大切なことは、その行為がポジティブに受け取られることであり、発信者を利他の主体にするのは、どこまでも、受け



手の側であるということです。この意味において、私たちは利他的なことを行うことができません」（中島二〇二一b、一三二頁、傍線は筆者）

この点については、未来世代に対する利他を考えたときにも、同様のことが言えるのではないだろうか。今、私たち現在世代の人間が行った行為は、未来においてポジティブに受け取られた時点で、「利他」に昇格する。しかし、例えば一〇〇年後の未来の人たちが、今の私たちが行った行為の結果をどのように受け取るかを、私たち自身は見届けることができない、というジレンマも存在する。⁽⁵⁾ このようなジレンマを解決するには、「死者」という視点から、中島が以下のように述べていることが一つのヒントになる。

「――利他は死者たちからやって来る。／私たちは、そのことに気づき、その受け手となることで、利他を起動させることができます。つまり、死者を「弔う」ことが、世界を利他で包むことになるのです。／私たちは、死者と出会い直さなければなりません。そして、その存在や行為、言葉の上に私たちが暮らしていることを自覚しなければなりません。／死者と対話し、自己の被贈与性に思いを巡らせるとき、そこに「弔い」が生じ、「利他」が起動します。私たちは死者たちの発信を受け取り、まだ見ぬ未来の他者に向けて、発信しなければなりません。／歴史の静かな継承者になるこそが、利他に関与す

ることなのではないかと私は考えています」(中島二〇二b、一三三―一三四頁、傍線は筆者、〽は改行を示す)

ここから、私たちが未来世代のために「よき祖先」になる努力をしておくこと、また、弔ってもらえるような生き方をしておくことが、重要になるのではないだろうか。このあたりの議論から見えてくるのは、モラロジーの「伝統尊重の原理」(廣池一九二八／一九八五、三二二頁⁽⁶⁾)が、現在世代から過去世代(祖先、死者)への尊重の方向においてのみならず、未来世代から見ての現在世代(という祖先、死者)への方向において生きてこないだろうか、という論点である。この議論は、筆者が研究してきた「継世代倫理」という通時的概念にも多分に通じるものであり、引き続き今後の検討課題としておきたい。

三. おわりに―廣池千九郎の遺産を受け継ぐ意味―

モラロジーの創建者・廣池千九郎(一八六六―一九三八)は、静岡県の畑毛温泉にて『道徳科学の論文』を執筆していたとき、訪れてきた香川初音氏から体調を気遣われて、このような提案を受けた。

「先生、お苦しゅうございましょう。せめて今しばらく筆をお休めになって、いくらかお楽におなりあそばしてから、またお書きあそばしては……」(モラロジー研究所編二〇〇一、四

八五頁)

それを聞いた廣池は、次のように答えた。

「そう思うであろうが、自分は神様をあざむくことはできない。死ぬまで筆を持ち続けなければならない。(…)この弱い体では原稿が書き上げられるか分からない。たとえ書き上げられたとしても、これが印刷され書物になるかどうか分からない。幸い書物になっても、果たして人様に読んでいただけるか、それも分からない。幸い読んでいただいても、果たして助かっていただけるか、それも分からない。今の人には読んで助かっていただいても、百年、千年後の人が真に助かっていただけるかどうか、分からないのだが、こうして苦しい中でも書きつづけなければならない。人の心に誠一字が分かってくれたら、こんなにたくさん古今東西の書物を集めて、研究に研究を重ねる必要はない」(モラロジー研究所編二〇〇一、四八五―四八七頁、傍線は筆者)

廣池にとって、そしてモラロジーにとって、救済の対象には、百年、千年後の人々が含まれる。つまり、「長期思考」(クルツナリックの言う「レガシー・マインドセット」、「大聖堂思考」)が内在しているということである。このことは、人類の、そして地球の有限性が見えてきた今の時代にあつて、モラロジーが果たすべき役割が決して小さくないことを示している。『道徳科学の論文』は、廣池が後世に遺した大きな遺産である。

その遺産を眠らせておくのか、「よき祖先」になるために活用するのかわかれば、我々の手にかかっている。

柳田國男は、冒頭で紹介した「御先祖になる」と語った老人について、「古風な心掛け」であると感心した（柳田一九四六／二〇一三、二三頁）が、「よき先祖（祖先）になる」ことを目指すことは、緊急事態にある現代にあつては、「古風」どころか、時宜を得た心掛けであり、「穏健」どころか、まことに先鋭的な心掛けであると言わねばならない。いま、彼ら（柳田と廣池）の著作から学ぶ意味は大きい。

注

(1) 「先祖」と「祖先」という語は基本的に同義で使用することが可能だが、「先祖」の方は、親族関係を、「祖先」の方は、親族に限定せず広く人類全体との関係を言い表す際に用いられる言葉と解釈して使用することができる。この用法は、本稿で検討する『グッド・アンセスター』の訳者で現代仏教僧である松本紹圭が、「先祖」という言葉が血縁を意識したイエの先人を指すニュアンスがあるのに対し、「祖先」は、たとえば「人類の祖先」というように、血縁を超えた人類集団としての繋がりを意識するニュアンスがある」（松本二〇二一、二八六頁）と述べていることに通じるものである。

(2) 原著は Krznaric (2020)、邦訳はクルツナリック (二〇二一)

である。書誌情報の詳細については、末尾に挙げた参考文献を参照されたい。

(3) 宗教学者の山折哲雄による『先祖の話』の解説によれば、「敗戦を間近にして、ひそかに民族の再生を念じつつ、死せる「先祖」と生ける「子孫」の永遠のつながりについて、生きつもどりつする思索を重ねています。／そこには、柳田自身が先祖をどうみていたのかという主観的な記述がみとめられると同時に、日本人の祖先観がどうであったかを知的にとらえようとする客観的な記述が含まれている。柳田自身の死生観と民俗学的な考察と知見が、いわば渾然一体となって語られている」（山折二〇一七、七四～七五頁、／は改行を示す）ということであり、本著作の内容がよくうかがえる。

(4) クルツナリックの著書（邦訳）の該当ページを指す。以下、特段の断りがない限り同様。「(：)」は、中略を示す記号として使用する。

(5) ここではこれ以上詳しく考察できないが、「偶然性」の問題と「利他」の問題、そして「世代間倫理」の問題が相互にリンクすることになる。もしかすると、今の私たちが何気なく行っている何らかの行為が、思いがけず、未来世代を利することもあるかもしれない。また逆に、未来のことを考えて行っていることであっても、未来世代を害してしまうこともありうる。

(6) 「伝統尊重の原理は道徳ことに最高道徳の実行の原因とその結果との関係における自然の法則を尊重するにありて、いたずらに一時的現形に現れたところのある個人の偉大なる力と徳とを尊敬して、その道徳の程度及びその事業の終局の結果のいかんをも問わねばるとき浅薄なる思想の表現ではない」（傍線は筆者が施した強調部分）

参考文献一覧

- ・伊藤亜紗編（二〇二二）『「利他」とは何か』、集英社（集英社新書）
- ・伊東俊太郎（二〇一三）『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』、麗澤大学出版会
- ・クルツナリック、ローマン（二〇二二）『グッド・アンセスター―わたしたちは「よき祖先」になれるか―』松本紹圭訳、あすなろ書房
- ・スチュアート、イアン（二〇二二）『不確実性を飼いならす―予測不能な世界を読み解く科学―』徳田功訳、白揚社
- ・ダイアモンド、ジャレド（二〇〇五／二〇二二a）『文明崩壊―滅亡と存続の運命を分けるもの―』上巻、草思社（草思社文庫）
- ・ダイアモンド、ジャレド（二〇〇五／二〇二二b）『文明崩壊―滅亡と存続の運命を分けるもの―』下巻、草思社（草思社文庫）
- ・竹中信介（二〇一六）『未来世代への利他性を考える―「世代間倫理」の視点から―』『モラロジー研究』七八号、モラロジー研究所、一二三―一四三頁
- ・竹中信介（二〇一九）『継世代倫理の可能性―希望ある地球と人類の未来の実現に向けて―』『地球システム・倫理学会会報』一四号、行人社、一三五―一三九頁
- ・徳永哲也（二〇一三）『ベーシック生命・環境倫理―「生命圏の倫理学」序説―』、世界思想社
- ・中島岳志（二〇二二a）『死者のビオス』『死者と霊性―近代を問い直す―』末本文美士編、岩波書店（岩波新書）、一七三―一八七頁
- ・中島岳志（二〇二二b）『思いがけず利他』、ミシマ社
- ・ハンセン、アンデシユ（二〇二〇）『スマホ脳』久山葉子訳、新潮社（新潮新書）
- ・廣池千九郎（一九二八／一九八五）『道德科学の論文第七冊』、モラロジー研究所
- ・松本紹圭「訳者あとがき」『グッド・アンセスター―わたしたちは「よき祖先」になれるか―』ローマン・クルツナリック著・松本紹圭訳、あすなろ書房、二八四―二八七頁
- ・モラロジー研究所編（二〇〇一）『伝記 廣池千九郎』、モラロジー研究所
- ・柳田國男（一九四六／二〇一三）『先祖の話』、角川学芸出版（角川ソフィア文庫）
- ・山折哲雄（二〇一七）『死者と先祖の話』、KADOKAWA（角川選書）
- ・若松英輔（二〇一二）『魂にふれる―大震災と、生きている死者―』、トランスビュー
- ・Krzmaric, Roman (2020), *The Good Ancestor: How to think long term in a short-term world*, London: WH Allen

